第３章　幸せ感と逸脱

本章では、「幸せ感（subjective well-being)」をキー・コンセプトとして、被害体験の有無・被害不安の高低が青少年の幸せ感にいかなる影響を及ぼしているか、また、青少年の幸せ感が逸脱行為とどのように結びつくかについて、調査し分析した結果を報告する。

１　幸せ感

（１）幸せ感の指標

今回の調査では、幸せ感の指標として、角野（1995a,b,1997）の「人生に対する肯定的評価尺度」を用いた。「人生に対する肯定的評価」とは、過去－現在－未来にわたる人生の主観的評価であり、この尺度は、回答者に対して、自分がどの程度幸せであるかについての総合的判断を求めるものである。なお、この尺度の項目は表３－１に示すとおりである。12 項目で構成され、評定は、「全くそうではない」を１点、「全くそうだ」を７点とする７件法による。したがって、幸せ感得点の取りうる範囲は最低 12 点、最高 84 点となり、点数が高いほど幸せ感が高いことを表すことになる。

表３－１　人生に対する肯定的評価尺度の項目

1. 私の人生は，すばらしい状態である.
2. できるなら，自分の人生を誰かの人生と取りかえたい. (*)
3. この先，人生に不満を持つようなことはきっとないだろう.
4. 私は，私の人生に満足している.
5. 人生をもう一度やりなおせたとしても，変えたいことはほとんどない.
6. これまでの人生での失敗は，結局自分のためになってきた.
7. 私の人生は苦痛に満ちている. (*)
8. 私はこれまでの人生の中で，こうしたいと思った重要なことはなしとげてきた.
9. 生まれてきたことに感謝している.
10. 大体において，私の人生は理想に近い.
11. 今までしてきたことが，これからの人生によい影響を及ぼすだろう.
12. 私は大きな期待をもって，これからの人生を楽しみにしている.

注）　逆転項目には，＊を付した.

（2）学年と幸せ感

学年×男女別の幸せ感の平均値を図３－１に示した。学年間差を検討すると、男子では中学１年と高校２年、中学１年と大学１年の間で、女子では高校２年と大学１年の間で、統計的に有意な差が認められた。[1] このことから、中学生から大学生へと学年が高くなるにつれ、男子は幸せ感が低くなり、女子は幸せ感が高くなる傾向がうかがえる。また、中学生では女子に比べ男子の方が幸せ感が高いが、高校生以上ではそれが逆転することが読みとれる。

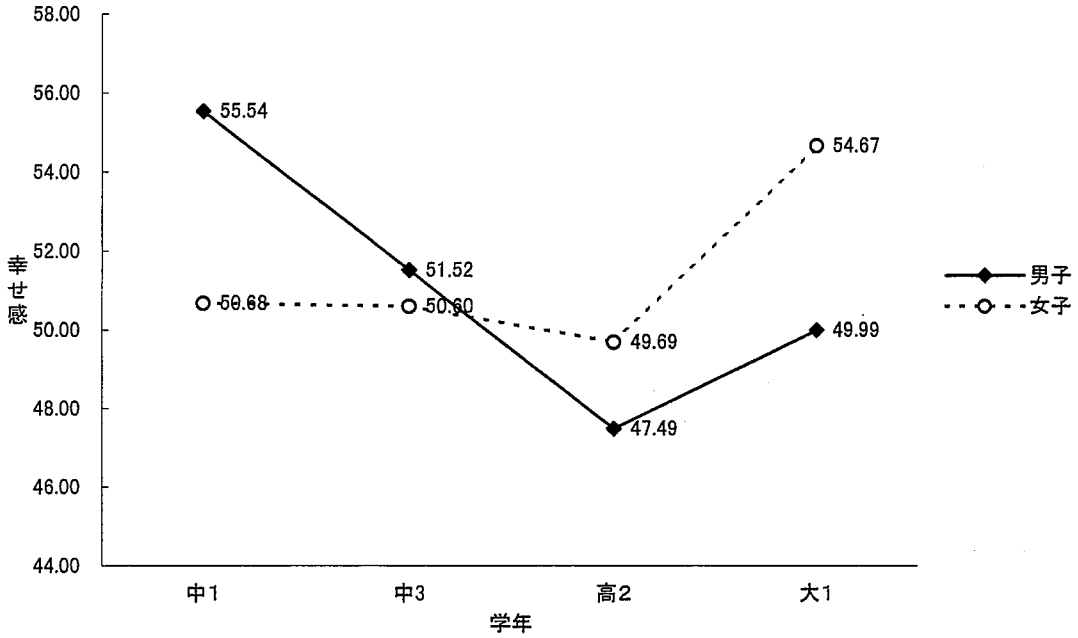

図３－１　学年・性別と幸せ感

[1] 分散分析をした後、Scheffe の多重比較を行った（有意水準５％）。

2　被害体験・被害不安と幸せ感

（1）被害体験と幸せ感

被害体験の有無が幸せ感にいかなる影響を及ぼしているかを検討するために、男女ごとに被害体験の有る群と無い群の幸せ感の平均値を求め、図３－２に示した。[2]

総じて、被害体験が有る群は無い群に比べ、幸せ感が低い傾向が読みとれ、特に、中学１年の女子では統計的に有意な差が認められた。[3]　このことから、恐喝・いじめ・痴漢といったネガティブな被害体験が、青少年の幸せ感を低める要因となっている可能性が示唆されたと言えよう。

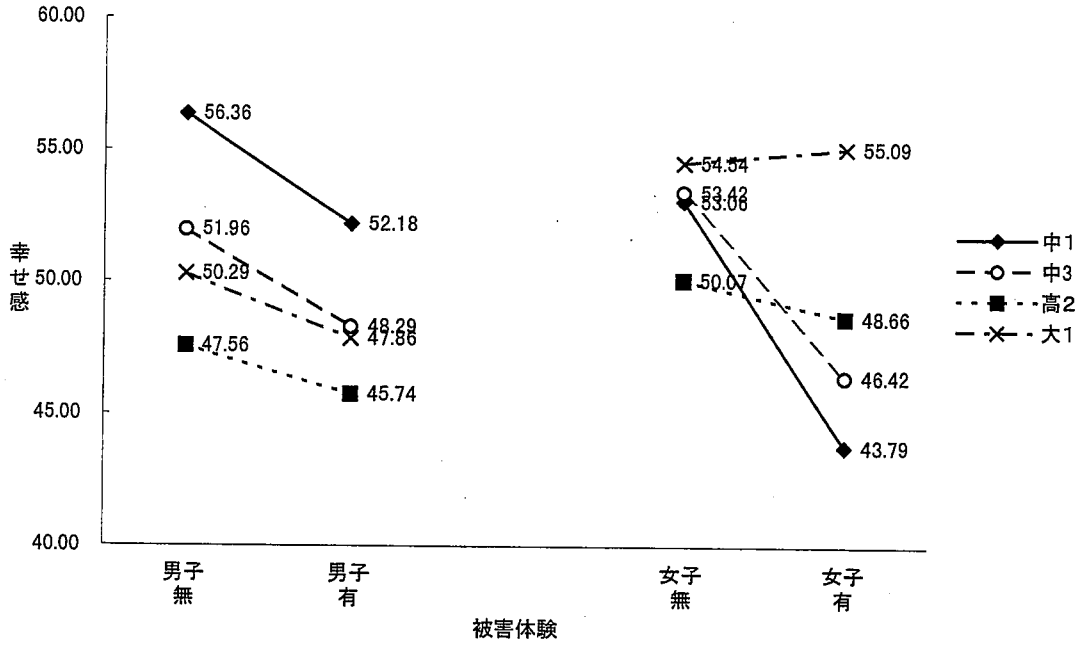

図３－２　被害体験の有無と幸せ感

[2] 本報告書では、原則として被害体験が多い群・中間群・無い群に分けて分析を行っているが、学年・性別によっては被害体験が多い群の人数が極端に少ないケースがあったため、ここでは被害体験が多い群と中間群を１つにまとめた。

[3] t=2.42, df=59, p<.05

（2）被害不安と幸せ感

次に、被害不安の程度が幸せ感にいかなる影響を及ぼしているかを検討するために、男女ごとに被害不安の高中低３群の幸せ感の平均値を算出し、図３－３に示した。グラフから一定の傾向を読み取ることはできず、統計的に有意な群間差も検出されなかった。したがって、被害不安の幸せ感に対する影響力は認められなかった。

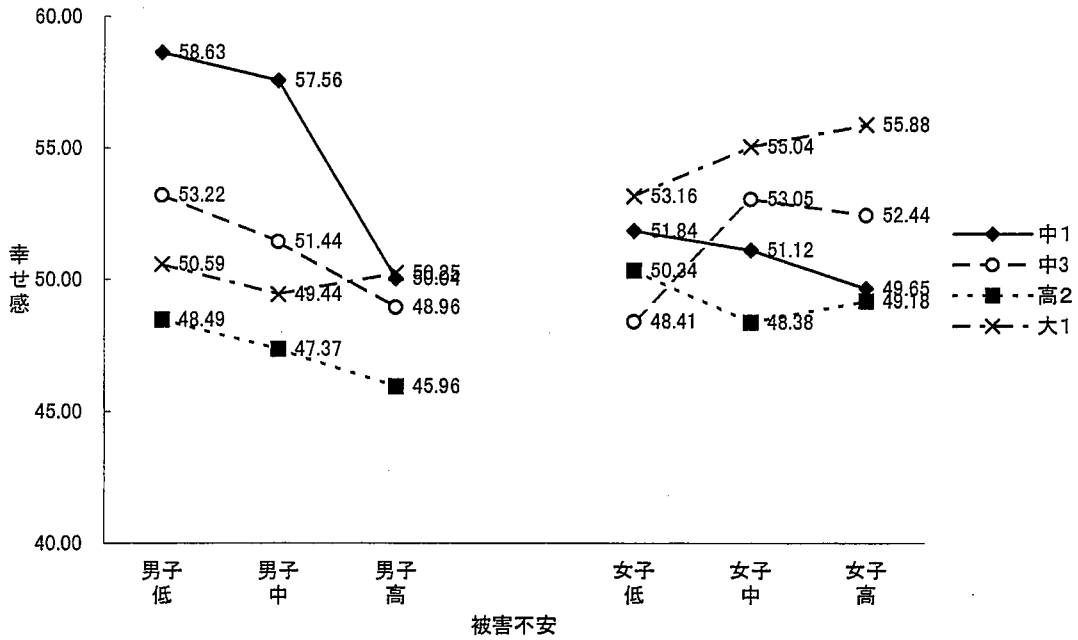

図３－３　被害不安の程度と幸せ感

3　幸せ感と逸脱

（1）幸せ感と不良行為

学年×男女別に、幸せ感の中央値を境界として被験者を高低２群に分け、不良行為傾向の強弱を検討した。図３－４は、各群の不良行為得点の平均値を表したものである。

統計的に有意な差は認められなかったが、女子ではいずれの学年でも幸せ感の低い群が高い群より不良行為得点が高かった。一方、男子では学年によってどちらの群の不良行為得点が高いかが異なり、一定の傾向は読みとれなかった。以上より、女子青年において、幸せ感の低い者に不良行為が多く見られる。

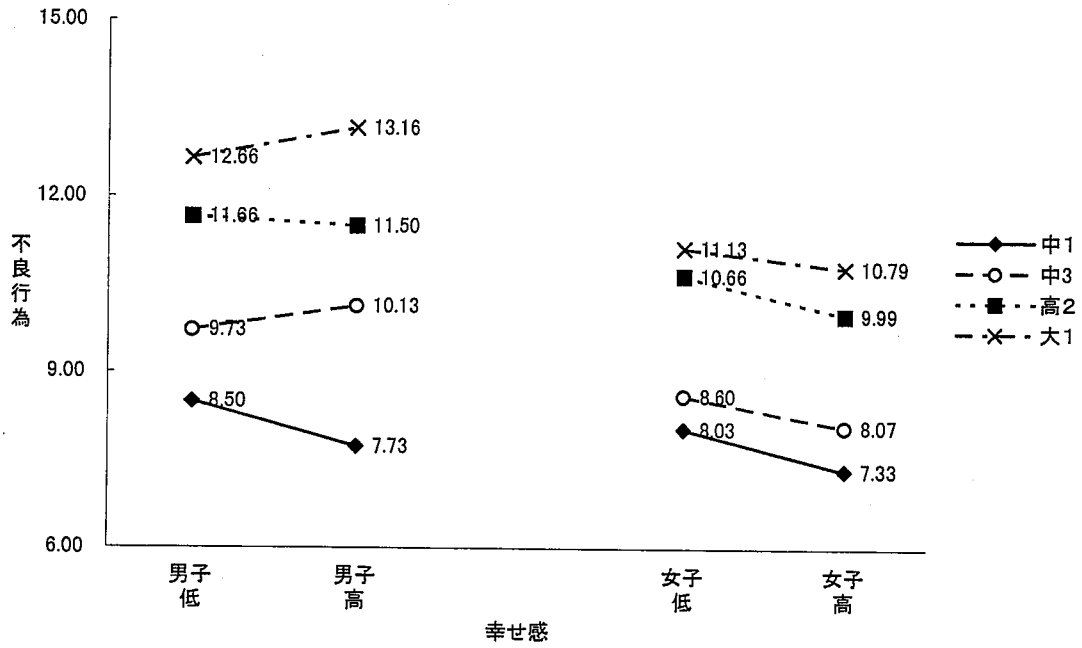

図３－４　幸せ感の高低と不良行為

（2）幸せ感と犯罪行為

前項と同様、学年×男女別に、幸せ感の高い群と低い群との間で、犯罪行為傾向の強弱を検討した。各群の犯罪行為得点の平均値は図３－５に示すとおりである。

大学１年女子を除き、幸せ感の低い群が高い群より犯罪行為得点が高く、中学１年女子、中学３年女子、高校２年男子・女子ではその差が統計的に有意であった。[4] 前項の不良行為では女子においてのみその傾向が見られたが、犯罪行為は性別によらず、幸せ感の低い者に多く見られる。

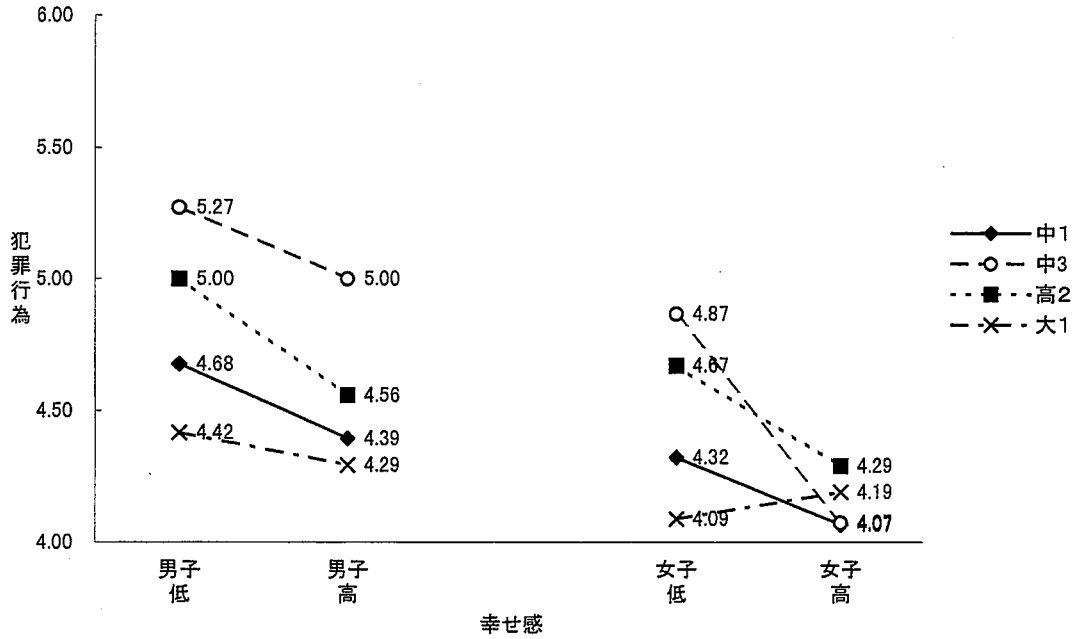

図３－５　幸せ感の高低と犯罪行為

[4] 中学１年女子：　t=1.71, df=43.9, p<.10
中学３年女子：　t=2.27, df=30.3, p<.05
高校２年男子：　t=2.09, df=135, p<.05
高校２年女子：　t=2.23, df=129.2, p<.05

4　まとめと今後の課題

本章での分析より、以下の４つの知見が導かれた：

① 被害体験は、青年の幸せ感に負の影響を及ぼす。

② 被害不安の、青年の幸せ感に対する影響力は認められない。

③ 幸せ感が低い女子青年に、不良行為が多く見られる。

④ 幸せ感が低い青年に、男女を問わず、犯罪行為が多く見られる。

ただし、これらの知見には以下の理由から制限が付くものと考えるべきであろう。

一つには、①③④に関しても、大半の学年×性別では統計的に有意な結果が得られていないことが挙げられる。したがって、別の標本やより大きな標本での調査を行うことで、この知見が一般的なものかを検討する必要があろう。

第二に、③④で、幸せ感と逸脱行為の間に、直接的な因果のパスがあるのか、あるいは何らかの媒介変数が存在するのかは、未解決である。これも今後の研究に持ち越される課題である。

なお、今回の調査では、幸せ感の指標として「人生に対する肯定的評価尺度」を用いたが、これにより、過去から未来をも見据えたうえでの幸せ感と、被害体験・被害不安・不良行為・犯罪行為との関係を検討することができた。現在の日常生活の中での感情体験を幸せ感の指標とした場合の、これらの変数との関係も、今後研究するに値するであろう。

5　文献

角野善司　1995a　人生に対する肯定的評価尺度の作成(1)　日本教育心理学会第 37 回総会発表論文集，95.

角野善司　1995b　人生に対する肯定的評価尺度の作成(2)　日本心理学会第 59 回大会発表論文集，23.

角野善司　1997　人生に対する肯定的評価尺度の作成(3)　日本心理学会第 61 回大会発表論文集，83.